慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	飛鳥川の淵瀬
Sub Title	The pools and shoals of the Asuka river
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.26- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

飛鳥川の淵瀬

川村　晃生

ここ数十年、日本の川は激しい変貌を遂げ、いまや細々とした水脈によって、かろうじてその命を保っている川さえある。東海道新幹線の大井川鉄橋上の車窓から、ひと目眼下の光景を眺めてみるといい。かつて「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と歌われたこの川は、いま干上り乾き切って、河床の砂利が一面に天日に曝されている。

こうした河川の衰退は、一にかかって全国至る所に造成されたダムにその原因が求められる。湛水ダムで言えば約三〇〇〇、砂防ダムに至っては約五五〇〇〇にのぼるとされる厖大な数のダムが、河水の自然な流下をずたずたに切り刻み、その命脈を絶とうとしているのだ。そしてそれは、近代工法による河川支配がもたらした当然の結果でもあろう。長良川河口堰反対運動の旗手である天野礼子氏は、二十世紀を「川殺しの時代」として総括されたが、それはよく事の本質を衝いていると言っていい。

しかしながら、近代河川工学の権威高橋裕氏が、「この百年間、日本の川は大規模な治水と水資源開発によって、あ

まりに人工化し、生態系と景観が犠牲になった」（「朝日新聞」一九九九、六、三付朝刊）と述べられ、「洪水との共存」という、古来日本にあった川との共存の方法を提示され始めたのは、近代河川工法への反省の弁として評価し得よう。それは一方で、いわば我が国の伝統的治水方法の見直しということを意味しようが、ともかくも治水の方法も、いよいよ自然との共生がはかられねばならない時代を迎えているのである。

ところでこうした河川の衰微の影響は、単に川の流れの中にのみとどまるものではなかった。それは同時に、川とともに暮らしてきた人々の生活をも変え、奪いもしたのである。一般に川漁の衰退は全国各地に見られるところだが、右の大井川について言えば、大井川はその流域の茶産業を根底から支えていたのであった。すなわち大井川流域の川根町一帯は、平地に比べて標高が高く、その冷涼な気候と昼夜の気温格差、さらにまた大井川の高い湿度が香り豊かな茶を育てたのだという（大高愛司『お茶八十八話』、私家版、平10）。しかしいま、川に水がなく、川霧が出ないので、お茶の味も香りも落ちたという（天野礼子『川は生きているか』、岩波書店、一九九八）。

さてこれに見る如く、かつて川はそこに住む人々の生活と密接に関わっていた。それは漁業に限られるものではなかった。そこから水を引いて田を作ってきた長い歴史に照らせば、川は人々の命を恵む源でもあった。だが一方で、人々は洪水や氾濫に艱苦し—もっとも氾濫による上流の栄養に富んだ土砂の新たな供給は、農民にとって天の恵みでもあったが—、またどこにでも容易に架橋できたわけでもない時代には、川は人々の生活の障害ともなった。いずれにしても人々は、川とともに生活し、川の表情を窺いながら生活を営んできたのである。そしてそれに比べて言えば、私たちはいかに貧しい川との付き合い方を続けていることだろうか。

*

飛鳥川は、古来文学作品を通して日本人によく知られた川である。奈良県高市郡高取町の高取山の東に発し、明日香村、橿原市を経て、生駒郡安堵村で大和川に注ぐこの川も、上記の意味において、古代の飛鳥びとの生活と深く関わったという点で言えば、やはりその例に洩れるものではなかった。本稿では、古代の文学作品を手がかりとしつつ、また歴史学の成果にも助けられながら、飛鳥川の文学形象という問題と、古代の人々と飛鳥川との関わりを考えてみたい。

『古今集』には、四首の飛鳥川詠がある。すなわち、

A　昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり（冬、三四一、春道列樹）

B　飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ（恋四、六八七、読人しらず）

C　世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬となる（雑下、九三三、読人しらず）

D　飛鳥川淵にもあらぬ我が宿も瀬に変りゆくものにぞありける（雑下、九九〇、伊勢）

の四首である。そしてこれら四首の成立時期について言えば、その作者から見て、まずBCの読人しらず詠が詠まれ、そののちADの作者判明歌が詠まれたことはまずまちがいなかろう。読人しらず詠が先行することは、和歌史的事実として一般的に認められるところである。では同じ読人しらずのBC二首については、いずれが先に詠まれたのであろうか。通説では、Cの歌のようなことが言われていたのをふまえて、Bの歌が詠まれたとされる。これまでの研究史に拠るならば、それに異を唱える余地はないであろう。しかしながら、かりに通説のように解し得るとして、では飛鳥川の淵が瀬になるような現実的状況がはたしてあったのだろうか。そしてまた現実に淵瀬の変化が起ったとするならば、そ

れが飛鳥川に限られるはずもないであろうに、なぜとりわけ飛鳥川のそれが詠まれたのであろうか。

この問題につき、以下に検討を加え私見を述べてみたい。なおCの歌は、『古今集』の現存最古写本の完本である伝公任筆本に、

世中にはなにかつねなるつねもなしそのつねなにそつねにかなしき

の形で採録されている。同じ本文は、従来雅経本にのみ傍書の形で見られたもので、それが伝公任筆本に本行化されていることからすると、この本文の再検討の必要があろうが、今は紙幅の都合上略に従わざるを得ない。

*

さてこうした『古今集』における飛鳥川の問題を考察するためには、まずもってそこに至るまでの飛鳥川と文学との関わり、及び飛鳥川の実態を把握することが必要であろう。飛鳥川はいかなる文学的形象がなされてきたのか、また飛鳥川がいかなる流れを形造り、その流域の人々と飛鳥川との間にどのような関係が形成されてきたのかは、それぞれ緊密に結びついた重要な検討課題と言わねばならない。そこでまず、『古今集』以前の飛鳥川の文学の骨格をなす『万葉集』について見ることから始めてみたい。

『万葉集』には、目下二四首の飛鳥川詠が認められる。そのうち、

飛鳥川もみち葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらし（巻十、二二一〇）

の一首は、葛城との地理関係から河内の飛鳥川（二上山の西麓に発し、羽曳野市の飛鳥を経て石川に合流）を有力視する説が古来存し、現在こちらを支持する説が多いように思われることからして、ひとまず考察の対象から除外した方が

よいかもしれない。そこで残り二三首について検討を加えたい。

ともかくも『万葉集』の飛鳥川の歌を通覧すると、瀬を詠んだ歌が多いことに気づかされる。

明日香川瀬々に玉藻は生ひたれどしがらみあればなびきあへなくに（巻七、一三八〇）

飛ぶ鳥の明日香の川の上つ瀬に生ふる玉藻は下つ瀬に流れ触らばふ〜（巻二、一九四）

などの例を初めとして、瀬を詠む作例は一〇首の多きに上っている。瀬を詠む例が多いということは、そのまま飛鳥川の実体を語ってもいるのであろう。飛鳥川は主に浅瀬を水が流れていく形態の川であったと考えてよく、決して水を満々と湛えてゆったりとした流れを形成していたのではなかったようだ。このことは淀というゆるやかな流れを形成する場を詠んだ歌が、飛鳥川には比較的少いことからも想像される。淀は、

明日香川川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに（巻三、三二五）

明日香川七瀬の淀に住む鳥も心こそあれ波立てざらめ（巻七、一三六六）

など二首の詠に見え、とりわけ後者の「七瀬の淀」は、

松浦川七瀬の淀は淀むとも我は淀まず君をし待たむ（巻五、八六〇）

の一首にも存して、佐賀県東松浦郡を流れる松浦川（現玉島川）にも認められる。そしてこの「七瀬の淀」が数多くの瀬の淀みを言う語であることからすれば、飛鳥川が湾曲部をあちこちに形造って流れていたことも確かなようだ。しかし、

絶えずゆく明日香の川の淀めらば故しもあるごと人の見まくに（巻七、一三七九）

の詠のように、明日香川が淀んだらわけありだといった歌の存在からすれば、飛鳥川は常態としては浅瀬を水が流れ下

る川であったと思われ、飛鳥びとはこうしたイメージで飛鳥川を受け止めていたと考えてよかろう。

淀むよりも瀬を流れ下るこの川は、それだけ清流を形造っていたにちがいない。たとえば、

今日もかも明日香の川の夕さらずかはづ鳴く瀬のさやけくあるらむ（巻三、三五六）

明日香川川門を清み後れゐて恋ふれば都いや遠そきぬ（巻十九、四二五八）

などの例に見える「さやけく」「清み」は、飛鳥川の清い流れを基調とした文学表現と見て大過なかろう。わずか一例であるが、興味深い行為として飛鳥川での禊ぎを詠んだ歌が存する。すなわち、

君により言の繁きをふるさとの明日香の川にみそぎしに行く（巻四、六二六）

の一首は、第三句以下を「龍田越え三津の浜辺にみそぎしに行く」と伝える異文を付載するから、難波の御津にもあてはめて詠まれたと思われるが、ともかくも恋の噂でけがれてしまった身を清めるために、飛鳥川でみそぎが行なわれたのであった。それは神奈備山の麓を流れる飛鳥川の神聖性を明示していようが、それも飛鳥川が清流であったことによっていっそう説得性を持ったと考えられる。

一方こうした浅瀬を常態とした飛鳥川は、流れも急であった。既掲の一三七九番歌の、「絶えずゆく明日香の川の淀めらば」という上句の仮定表現は、飛鳥川が淀むことなく流れ下っていくことを前提としたものであったが、それにとどまらず、

明日香川行く瀬を早み早けむと待つらむ妹をこの日暮しつ（巻十一、二七一三）

の一首の如く、恋人の訪れを早くと願う女性の心情の比喩として、瀬を流れ行く飛鳥川の早さが用いられ、また

～神奈備山の帯にせる明日香の川の速き瀬に生ふる玉藻の～（巻十三、三二六六）

～神なびの三諸の神の帯にせる明日香の川の水脈速み～（巻十三、三二二七）

の二首のように、「速き瀬」や「水脈速み」が飛鳥川の流れの特質を形造っていたのでもあった。それは既述の如く、淀みよりも瀬によって、その流れが形成されていた飛鳥川においては当然のことであったろうが、そうした瀬は時として川水を一気に増大させることもあったようだ。『万葉集』の飛鳥川の歌の中には、

今行きて聞くものにもが明日香川春雨降りてたきつ瀬の音を（巻十、一八七八）

という一首が存する。この歌の成立事情は不明だが、おそらく飛鳥を故郷とする作者がそこを離れて他所にいた折の望郷歌であろう。ここでは春雨が降ると必ず増水して、その水音を高く響かせていたらしい飛鳥川に思いを馳せて、自らの故郷が偲ばれている。歌の中に「たきつ瀬」とあることからすれば、こうした折の飛鳥川はかなり激しい流れを形造っていたのであろう。そしてこういう一首を前提とすれば、

明日香川水行き増さりいや日異に恋の増さらばありかつましじ（巻十一、二七〇二）

の一首が詠まれる背景も理解されよう。ここでは日増しに募っていく恋心の比喩として、飛鳥川の増水が詠まれている。飛鳥川は日増しに、目に見えて水量が増えていくような川であったのだ。

このように飛鳥川は、瀬を主体とし、一部に淀みを形成しながらも、早い流速で、時には増水をくり返しつつ、流れ下っていく川であったと見てよいであろう。そして万葉びとたちにとって、おおむね飛鳥川は右のようなイメージにおいて捉えられていたということになる。だが一方で、飛鳥川は彼らの実生活の中でも重要な役割を担い、また障害となる場合さえあった。しばらく以下に、万葉びとたちの生活において、飛鳥川がどのように認識されていたのかを考察してみたい。

まず第一に、飛鳥川はこの流域に住む人々が交流する上で、一つの障壁であった。飛鳥川は、川を隔てて住む人々の円滑な交流を妨げ困難にさせたようだ。それは『万葉集』において、とりわけ恋愛生活の上の支障となって詠まれている。

明日香川なづさひ渡り来しものをまこと今夜は明けずもゆかぬか（巻十二、二八五九）

この歌は、現在底本として一般に拠っている西本願寺本に「高川避紫越」とあり、難訓個所として諸説が存する。古典文学全集本に従って「なづさひ渡り」とすれば「難渋して川を渡る」の意、また古典集成本に従って「高川よきて」とすれば「増水した川を避けて」の意となる。いずれにしても二人を隔つ飛鳥川の障害を乗り越えて、ようやく逢うことができた男女の心情を詠んだ一首である。ここでは明らかに、飛鳥川は恋の障害であった。

こうした人々の交わりを遮る飛鳥川の困難を軽減するために、彼らは川に橋を渡した。それは多く石橋であったらしい。『万葉集』には、以下の如く多くの飛鳥川の石橋詠が見られる。

明日香川明日も渡らむ石橋の遠き心は思ほえぬかも（巻十一、二七〇一）

飛ぶ鳥の明日香の川の上つ瀬に石橋渡し下つ瀬に打橋渡す～（巻二、一九六）

年月もいまだ経なくに明日香川瀬々ゆ渡し、石橋もなし（巻七、一一二六）

二首目の長歌には、石橋とともに打橋（板を打ち渡した橋）も詠まれるが、飛鳥川には多く石橋が設けられていたことが、右の諸例によって理解されよう。これらの石橋は、上田篤氏『橋と日本人』（一九八四、岩波書店）に拠れば、自然に配されたトビイシと理解した方がよいのかもしれないが、そういう石を渡って万葉びとたちは互いの交わりを保ったのであった。それは二七〇一の如く、石と石の間が遠く不便なものであったろうし、また一一二六の如く壊れやすい

ものであったかもしれないが、しかし人々にとっては重要な移動の手段であった。そして飛鳥川において石橋が発達したのは、前述の如くその流れが主に瀬を形成していたからであろう。現に右掲の三首のうち、一九六には「上つ瀬に石橋渡し」とあり、一一二六には「瀬々ゆ渡し、石橋」と詠まれている。いずれにしても石橋は、その利便性や永続性に不足はあっても、飛鳥の里に住む人々にとって重要な施設であった。ここには飛鳥びとと飛鳥川との生活上の緊密な関係が認められると言ってよいであろう。

ところでもう一つ、飛鳥川が人々の生活の中で重要な意義を担っていたと思われる証跡が、『万葉集』の中に見出される。次に示す二首を見てみよう。

明日香川堰くと知りせばあまた夜も率寝て来ましを堰くと知りせば（巻十四、三五四五）

明日香川しがらみ渡し塞かませば流る、水ものどにかあらまし（巻二、一九七）

ここには飛鳥川を堰くという行為が詠まれている。もっともこれらのうち前者は、巻十四に収める東歌（未勘国相聞往来歌百十二首）であって、現今では大和の飛鳥地方の歌が伝播したとする説と、東国の某所の明日香川を詠んだとする説に分れており、いずれかに決する明確な論拠が得られていない。慎重に配慮すれば、後考に委ねるべきであろう。また後者は、反実仮想の形式によって詠まれている点に留意すれば、「堰く」は現実の営為としてはそのまま容認し難いとも言えるであろう。従ってこれらの点からすれば、右の二首によって飛鳥川を堰くという万葉びとの所為を導き出すのは、いささかの困難を伴うようにも思われるのである。いったい飛鳥川には井堰が設けられていたのだろうか。以下しばらく、堰をめぐって飛鳥びとと飛鳥川との生活上の関わりについて検討を進めたい。

*

実は飛鳥川には、早くからいくつかの堰が設けられていた。そのことを歴史的事実として論証されたのは、和田萃氏「飛鳥川の堰―弥勒石と道場法師―」（『日本史研究』一三〇、一九七三、一）であった。氏によれば、飛鳥川右岸のいわゆる飛鳥地方は、五世紀後半より本格的な開発が着手されたが、それに伴い飛鳥川を利用した河川灌漑及び排水が現今に至るまで一貫して行なわれてきたとされる。氏は承保三年（一〇七六）九月十日の「大和国高市郡司刀禰等解案」（『平安遺文』第一一三四号）に見える七箇堰、すなわち字木葉堰、豊浦堰、大堰、今堰、橋堰、飛田堰、佐味堰を、現在飛鳥川の上流から藤原京域内に至るまでの間に設けられている一一の堰、すなわち大井手、阪田井堰、岡井堰、橘井堰、川原井堰、木葉井堰、豊浦井堰、雷井堰、田中井堰、高殿井堰、醍醐堰と比較され、木葉堰、豊浦堰の二堰が一致することを初めとして、いくつかの合致する状況が推定できることから、旧七箇堰は飛鳥川に設けられていた堰を上流の木葉堰から順次記載したものと考えられている。そしてこれらのうち、木葉堰や豊浦堰は七世紀前半にまで遡り得る可能性をも示唆された。詳細な論証は氏の御論考に譲らねばならないが、要点のみ記せば、まず木葉堰についてはその名称が崇峻紀元年是歳条に見える飛鳥衣縫造祖樹葉の名を伝えるものであること、また現在飛鳥川東岸の小字「木ノ葉」と「下川戸」の字界に立つ弥勒石の往昔における実態や道場法師説話などが、七世紀前半という堰の設置時期を考定する上で重要な状況証拠となることなどを述べられている。また豊浦堰についても、豊浦地区の現地表に見られる地割が七世紀前半のそれをかなりよく残していることや、古宮土壇周辺の発掘調査によって検出された庭園遺構のうち、とくに七世紀前半の土器が出土した大溝の存在などから、これも木葉堰と同じ頃の時期に設置されたのではないかと推定され

たのである。

以上の想定に従うならば、これら両堰は、灌漑施設として豊かに飛鳥の里をうるおしたものと考えてよい。とくに豊浦堰の灌漑範囲は、和田氏によれば、かつて小墾田、石川、軽の地域に及び、その灌漑面積は最も広きにわたったらしい。このあたりには蘇我氏を中心として数多の豪族が住んでいたのだが、飛鳥川とそこに設けられた堰は、ここに住む人々にとっていわば命綱であったと考えてよかろう。川はただ水が流れていく一筋の路ではなかった。それは彼らの生活を根底から支えた、命を恵む流れであったのである。その意味では、既述の橋の場合と同様に、飛鳥川はその流域の人々ときわめて密接な関わりを持っていたのであった。そしてそれは明らかに、飛鳥川が文学の中に立ち表われてくる基盤を形造ったものと思われる。すなわち、すでに飛鳥川が多く瀬や早い流れや増水などによって詠まれる旨を記したが、そうした飛鳥川の文学的形成は、右に述べ来ったような飛鳥川と人々の生活との密接な関係を背景になされ始めたと考えねばなるまい。そしてそれを確認した上で、次の検討課題に移ることになる。

*

さて論点は、一歩冒頭の飛鳥川詠の核心に近づくことになった。すなわち飛鳥川の淵瀬の問題である。いったい飛鳥川は、『古今集』の読人しらず詠に至る以前、淵瀬が問題にならなかったのだろうか。また和歌史の中で、淵瀬そのものはどのように詠まれ始めたのだろうか。そこでまずその前史を明らかにするために、『万葉集』における淵瀬について検討を加えてみよう。たとえば、

三川の淵瀬も落ちず小網さすに衣手ぬれぬ干す児はなしに（巻九、一七一七）

の一首においては、三川（大津市四ッ谷川とも愛知県矢作川とも言うが、未詳）の淵にも瀬にも小網がかけられている様が詠まれているが、ここでは淵と瀬は川の二つの代表的な地形として対照的に用いられているにとどまる。それは、

淵も瀬も清くさやけし博多川千とせを待ちて澄める川かも（続日本紀、巻三十）

においても同様であると言えよう。これらはいわば淵と瀬を形状としてそのままに詠んでいるにすぎないが、一方また両者の変化を詠んでいる点において、飛鳥川の淵瀬を考えるための参考とすべき歌も見出される。すなわち、

我が行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にありこそ（巻三、三三五）

の一首は、大伴旅人が神亀五年（七二八）頃太宰帥として筑紫に下った折、故郷の飛鳥やかつて訪れた吉野の地を懐しんで詠じた五首の内に含まれるものである。歌に詠まれる「夢のわだ」は、奈良県吉野町の宮滝付近の淵の名だが、この連作中の、

我が命も常にもあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため（巻三、三三二）

の象の小川と同様に、遠く筑紫から吉野を追懐したものと思われる。そして注目すべきは、「夢のわだは、瀬になどならずに淵のままであってくれ」と詠んで、淵から瀬への変化に時の流れや転変を象徴させている点である。旅人にとって淵が瀬になる形状の変化は、自らの心象に刻まれた風景の崩壊であり、それはそのままに時世の変化を意味してもいた。しかも興味深いことには、旅人には次のような類似の作が見出されもするのである。

しましくも行きて見てしか神奈備の淵は浅(あ)せにて瀬にかなるらむ（巻六、九六九）

これは天平三年（七三一）、旅人が奈良の家にあって故郷の飛鳥京を思って詠まれた一首である。ここでも前の「夢のわだ」詠と同様に、時世の変化や転変が淵から瀬への形状の変化に象徴されているわけだが、『古今集』の飛鳥川詠と

の関連において、本首が「夢のわだ」詠よりもいっそう重要視されるのは、ここに詠まれる地名が「神奈備の淵」であるという点である。言うまでもなく神奈備の淵は、飛鳥川の雷丘付近の淵を指し、『古今集』の読人しらず詠と地を一にしているのである。飛鳥川の淵が瀬になるという地形的変化は、実は『古今集』の読人しらず詠より早く、天平三年の時点において旅人によって注目されていたのである。そして同様な趣向や手法の歌が、同じ旅人の「夢のわだ」詠にも見られることからすれば、何か両首に共通する、例えば漢詩文の如き典拠ともなるべきものが、旅人の知識の中にあったのかとも疑われるのだが、しかしそうした典拠の詮索は目下の私の興味をあまりそそらない。ともかくもここでは七二八年と七三一年というきわめて近接した時点において、吉野川と飛鳥川における淵瀬の変化を危惧して嘆く歌が詠まれていたという事実を確認すればよいであろう。いったいなぜ八世紀前半に、吉野川や飛鳥川は淵瀬の変化が歌のテーマとして取り込まれるようになったのだろうか。

実はこの意味ありげな問題を解く鍵が、すでに私たちには与えられているのである。もっとも吉野川については、この問題に迫るための材料を欠いており、しばらく不問に付さざるを得ないのだが、飛鳥川についてはすでに有力な考察の糸口が与えられている。そこで以下、しばらく飛鳥川の淵瀬の問題について、検討を加えてみたい。

*

実は右の問題を抱えていた頃、私は一つの興味深い論考とめぐり合った。平川南氏「環境と歴史学」(『歴博』75、一九九六、二)がそれである。氏はこの御論の中で、自然環境との関連から歴史の解明をしていく重要性を説かれるのだが、その中で天平宝字六年(七六二)に遣唐使船が難波津で座礁した事件を取り上げられた。それは『続日本紀』の同

年四月十七日の次の記事を指すものと思われる。

丙寅、遣唐使駕船一隻、自二安藝国一到二于難波江口一、着レ灘不レ浮。其梅亦復不レ得二発出一。為レ浪所レ揺、船尾破裂。於レ是、撿二節使人一、限以二両船一。

すなわち前年十月に遣唐使船四隻の建造を命じていた安芸国から、完成した船が出発地の難波津に回送されて来たのであったが、この時難波津で座礁事件が起きたのである。平川氏はこの座礁の原因を、近年の地質学の研究成果に求められ、淀川及び大和川からの大阪湾への流入物が七世紀から八世紀にかけて著しくなったという事実と結びつけられた。そしてそれが、七世紀以降の古代国家統一にむけての、都城や大寺院の造営に必要な多量の木材や粘土（瓦や土器の生産用）を調達するための、淀川流域の森林伐採や粘土開発といった環境破壊に起因するものであったと考えられたのである。そしてそれによる淀川や大和川への土砂の多量流入が、難波津を浅瀬と化して遣唐使船の座礁を生ぜしめ、ひいてはそれが難波京の廃都の最大の原因となったことを推定されたのである。森林伐採が大きな環境破壊を招くことは、今も昔も変らないが、それが淀川及び大和川において起っていたことは、いたく私の関心を惹いた。飛鳥川は大和川の上流である。もしかしたら飛鳥川でも同じような事が起っていたのではないか。そして飛鳥川の淵から瀬への変化は、そうした森林伐採のような環境破壊を背景にしていたのではなかったか。

こうした朧げな疑問が頭を掠めていた時、実は私は幸運なことに、さらにもう一つの論考と解逅したのであった。それは西岡常一・小原二郎著『法隆寺を支えた木』（日本放送出版協会、一九七八）であった。同書は我が国の寺院建築と木材との関わりを、昭和の最後の宮大工と言われた西岡氏と建築学者の小原氏が多角的に論じたもので、その内容は深くかつ多彩だが、その第六章にあたる「古代における木材の輸送」の中の第一項「大和平野と寺院の建立」におい

て、決定的とも言うべき新しい知見を得たのであった。以下に要旨を記すと、

仏教の伝来によって寺院の建築が始まったのとともに、都の造営も始まった。聖徳太子の時代には大きな寺だけでも二〇の多きに達し、また天皇の一代ごとに建設された都は、宮殿や臣下の住宅など、いずれも莫大な量の木材を消費した。古代において、木材の資源供給の範囲はきわめて狭く、そのために近くの森林は急速に伐り開かれていった。そして一度伐採されてしまうと、その復活は容易ではなく、大和地方の美林も荒廃の一途を辿る運命を負わねばならなかった。そしてついにはその中心である飛鳥川も、わずかの降雨で洪水を起し、土砂を流出して、しばしば川瀬を変更するようになったのである。

といったわけで、冒頭に掲げた『古今集』のBの歌「飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ」などは、その間の事情を物語るものであることが指摘されていたのであった。

遣唐使船を座礁させた淀川や大和川の土砂流出は、早くに飛鳥川において起っていたのである。法隆寺が推古一五年（六〇七）の完成と伝えられることから類推すれば、飛鳥川上流の木材の伐り出しは七世紀初頭頃に盛んになされていたと考えてよかろう。そしてその結果、飛鳥川は氾濫をくり返すことになったものと思われる。とすればこれより一世紀後、大伴旅人が神奈備の淵によって飛鳥川の淵瀬の変化を詠んだのも、蓋し当然のことであった。そしてさらに、既述の如く『万葉集』の中に、雨による飛鳥川の増水を印象的に詠んだ歌が見られたことも、言ってみれば当り前のことだったのである。すでに飛鳥川上流の山々は、その保水能力をほとんど失っていたにちがいないのである。

私は早速に小原氏に私信を認めた。氏がいかなる資料に拠って右のような見解を示されたのか、いったい飛鳥川の氾濫のような具体的事実が、たとえば歴史上の文献の中に確認できるのか、それを知りたかったからである。氏からは折

り返し懇切な返書を賜わった。それによれば右の記述は、昭和初年に大阪の鴻池組の役員をしておられた江崎政忠氏が、本業の林業のかたわら木材の文化史に深い関心を寄せられ、資料の収集や論文の発表をされていたのだが、その江崎氏のメモの中にあった記述に基づいて書かれたというのである。従ってそれは文献上の歴史的資料に拠ったのではなかったらしい。しかしこの見解は、歴史学者や地質学者の識者の間ではかなり一般的に知られた事実であったようである。というのも前引の和田萃氏「飛鳥川の堰」においても、その冒頭部分に、

往昔、淵瀬常ならぬ川と詠まれた飛鳥川は、現在よりもはるかに川巾が広く、流れも急であったらしい。飛鳥よりやや下流、藤原京域内の航空写真をみると、飛鳥川左岸のかなりの範囲に、不規則な地割の存在を指摘できるから、何度も大規模な氾濫に見舞われたものと推測される。

と記されているからである。

飛鳥川はやはり氾濫をくり返していたのだった。それはまずまちがいなく、飛鳥時代の寺院建築と新都建設のための森林伐採が齎したものと見てよかろう。そしてその洪水と氾濫の度に、川はその姿を変えたのだった。流路も変化を余儀なくされたかもしれないが、川床も大きく影響を蒙ったであろう。淵の深みには土砂がたまって、瀬と化したこともあり得よう。もっとも瀬が多く流れの早い飛鳥川には、自然の淵がどれほど形成されていたのか、疑念をはさむ余地があるかもしれない。『古今集』（哀傷、八三六、忠岑）には、

瀬を堰けば淵となりても淀みけり別れをとむるしがらみぞなき

という一首が見える。これに拠れば当時堰かれてできた水の深みも、人工的な淵と認識されていたようである。とすれば「飛鳥川淵は瀬になる」と詠まれたその淵も、堰かれた人工の淵であった可能性もあり得る。井堰の淵が飛鳥びとの

生命線であったことに思いを馳せれば、それへの土砂の堆積は重要な彼らの関心事であったはずである。しかしいずれにしても、飛鳥川の淵は事実として瀬に化していたのであった。そしてこの事実を眼前にした人々の中から、『古今集』の読人しらず詠の如き歌は詠まれ始めたのであった。そしてそこでは、やはり前述した如く、飛鳥川が流域の人々の生活に密着した川であったことが振り返られねばならないであろう。飛鳥川は人々の生死を左右しかねない、生活上この上なく重要な意義を担った河川であった。人々は常に飛鳥川の流れを注視していたにちがいない。日々飛鳥川を眺め、飛鳥川の恩恵に浴し、また時には飛鳥川を生活の障害とさえ感ずるような人々と飛鳥川との交流の中から、飛鳥川の淵瀬の歌は誕生したのである。